

水面下の結束力

Coming together in the face of the unseen

April 20, 2020

By Staff Sgt. Matthew Gilmore
374th Airlift Wing Public Affairs

50グラムのプラスチック、7インチの輪ゴム2本、U.S.レターサイズのクリアファイル1枚。これらは、国立衛生研究所が使用を認める3Dプリンター製フェイスシールドを一つ作るために必要な材料だ。材料は至ってシンプルだが、感染症に立ち向かう上で、飛沫から身を守るのに役立つことが期待される。

その知識を念頭に、横田基地第374整備中隊製作小隊金属技術部は、世界中で新型コロナウイルス感染が拡大している状況を受け、横田の人員防護用品の供給を強化するため、任務の一部を転換し、200個のフェイスシールドを生産した。

「このアイデアは、ハワイ州パールハーバー・ヒッカム統合基地にいる我々のマネージャーからのメールから生まれた。現地の医療チームは、ハワイ全域でのCOVID-19の脅威に対応するために必要な防護用品の不足に苦労していた。この危機に対応しようと、製作小隊は、医療チームが安心して任務を行えるよう、3Dプリント製プラスチック基板とどこにでもある事務用品で作れる簡易フェイスシールドの生産に取り組んだ」と第374整備中隊金属技術工ガブリエル・フランコ軍曹は述べた。

「そのメールを読んだ時、自問した。自分たちの専門は既製品が使えない航空機の部品を製作することだ。我々が保有する3Dプリンターを活用してミッションに協力できる。航空機のために日々取り組んでいる課題と共通しているので、横田のためにフェイスシールドを生産できるのではないかと」

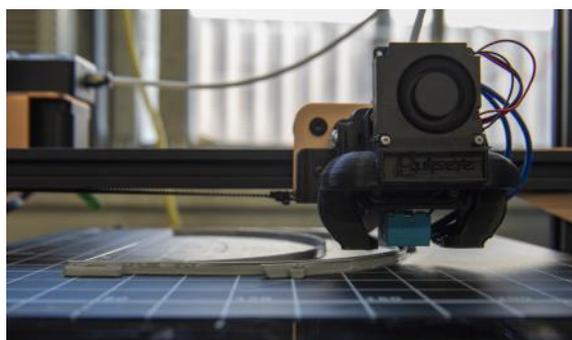
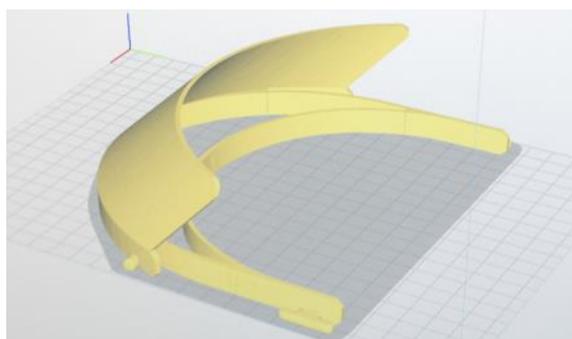
その自問と積極的なアプローチによって、フランコ軍曹のアイデアは指揮系統の一連の承認を得て、わずか2日間のうちに横田基地の防衛の最前線で働く第374憲兵中隊と第374医療群の隊員たちが感染防止に更に役立つフェイスシールドを着用することを可能にした。

「フランコ軍曹と製作小隊の同僚たちは、それを実現するために真剣に取り組んだ。彼らは今後の必要性を鑑み基地のリーダーシップに広く受け入れられる具体策を提案しただけでなく、生産量上げるために私物のプリンターまでも持ち寄った」と第374整備中隊司令クリス・ラモーゼ中佐は述べた。

また、ラモーゼ中佐は、「一つの印刷におよそ1時間20分かかかるが、これらの空兵たちの一連の努力なしに、ゲートの職員、補強隊員、医療チーム、チャイルド・ディベロプメント・センターのスタッフの現在の防護強化は実現しなかった」とつけ加えた。

この行動は、横田基地でCOVID-19感染例が発生するのを防ぐために有効とされる防護対策となっている。

「これらのフェイスシールドは、目、鼻、口を護り、前線で働く人々の飛沫感染を防止するために大事なものだ。マスクや他の個人防護用品と組み合わせて使用することで、働く人々を守り、世界中で不足に直面している医療用品を節約し、使用期間を延ばすだけでなく、仕事をする能力が維持できる」と第374航空宇宙医療中隊航空宇宙医療主任ケンジ・タカノ中佐は述べた。



「これらの3Dプリンター製フェイスシールドの生産は、新型コロナウイルスの封じ込め戦略でバリアを強化し、チーム全体が一丸となり、COVID-19の脅威からコミュニティを守るために重要な専門知識を提供する優れた例だ」とタカノ中佐はつけ加えた。

型破りの大きな脅威と立ち向かう時、コミュニティを守るためにはチーム横田の結束力が必要となる。

「この生産ラインはすぐに軌道に乗ったが、もし本来の業務以外のことも行うことができなければ、3Dプリントというアイデアを思いつくことはなかっただろう。そして、(新型コロナウイルスのパンデミックにより)引き起こされている様々な問題は一人ひとりの努力もさることながら、横田全体で立ち向かっていくことである。感染が拡大する前に横田の人員を守る手助けができた」とフランコ軍曹は述べた。

この先、フェイスシールドが更に必要となった場合、個人で3Dプリンターを所有していて生産を支援したい方は、金属技術部に連絡して詳細を確認してください。

